

近世・近現代における村の飛地について

— 現泉大津市域を事例に —

桑 原 公 徳

まえがき

現在、飛地といえば、国家レベルのものから、都道府県、市町村、さらには大字まで、各種段階のものがある。日本史あるいは歴史地理学の研究課題となるのは、近世における藩領と村の飛地であろう。前者は城付きの領地に対して遠隔地に分散する知行地であり、後者は親村から離れた他村にある土地をさす。このうち、近世村の飛地は、近現代に引き継がれ、現在の市町村において、行政的あるいは社会的に問題となっている例もみられる。その意味では、飛地の問題は今日の課題ともなるのである。

近世および近現代における藩や村の飛地は、藩政や領主の村落支配、あるいは農村の生産活動に関わる重要な課題であるとみられる。しかし、従来、これらについての研究業績は乏しい。近年、藩領の飛地については、福島雅蔵氏のすぐれた研究^①があるが、村のそれについては、寡聞にして知らない。私が飛地の問題に関心をもったのは、『泉大津市の地名』

の執筆・編集に関連した資料整理の際、近世の検地帳、および近代の土地台帳・地籍図などに、村域以外の村の耕地が多数に含まれていることを知ったからである。とくに、近世村の検地帳に他村領の田畑が含まれていることは、村切された村域を単位として行われた検地の概念と矛盾する。そこで、こうした疑問を解明するために、まず、現泉大津市域に分布する飛地の実態を明らかにしようと考えたのである。

検地帳の小字名や飛地の検討資料には、それに関連して作成されたであろう検地絵図が、土地台帳の小字名や飛地の検討資料には地籍図が有効であろう。しかし、検地帳と検地絵図が揃って残る例はむしろ少ない。いま対象とする泉大津市域には、現在のところ、検地絵図の類は一枚も残っていない。このような場合、というよりも、検地絵図の有無に拘らず、検地帳の小字名の検討には、近代の土地台帳および地籍図のそれとの照合が必要と考えられる。とくに地籍図の利用は、景観の変遷が推定されるほか、小字名の増減やその配置の状態を具体的に確かめることができる点で有効である。なお、本

稿では、近世の飛地研究にも、近代の地籍図が役立つことを例証したい意図をもっている。

一、土地台帳・地籍図からみた飛地

近世には村の飛地が広く分布していたものと考えられる。それは『地方凡例録』や『地理細論集』などに飛地のことが記されていることから推察できる。地租改正の資料にも、それに關した事項がみられるので、明治以降においても各地に存在したことが知られる。私も各地で飛地の記された地籍図

をみてきた。しかし、大阪府泉大津市付近ほど多い地域は、全国的にみて稀ではないかと思う。

『泉大津市の地名』に収録している各村（大字）の小字数は表1の通りである。各村には村域内の小字のほかに、飛地として他村域に相当の小字数が分布している。我孫子村は周辺の六か村に飛地を持っており、その他の村でも二〜四か村に及ぶものが多い。綾井村の場合は、飛地としては表に現われていないが、耕地は散在するものが多く、村域もまっ

ていない（『泉大津市の小字図』参照）。

表1 現泉大津市域における村別の村内小字数と飛地の小字数（『泉大津市の地名』による）

村名〔飛地村〕	小字数	村名〔飛地村〕	小字数
穴 田 村	23	宇多大津村	33
〔我 孫 子 村〕	8	〔板 原 村〕	3
〔豊 中 村〕	1	綾 井 村	27
我 孫 子 村	69	尾井千原村	23
〔宮 村〕	6	〔森 村〕	1
〔池 浦 村〕	23	〔千 原 村〕	1
〔虫 取 村〕	4	北 曾 根 村	27
〔穴 田 村〕	4	〔南 曾 根 村〕	10
〔板 原 村〕	2	〔森 村〕	3
〔豊 中 村〕	1	〔二 田 村〕	2
池 浦 村	70	助 松 村	99
〔我 孫 子 村〕	9	〔森 村〕	2
〔虫 取 村〕	5	〔二 田 村〕	12
〔宮 村〕	8	千 原 村	17
〔穴 田 村〕	1	〔北 曾 根 村〕	3
板 原 村	48	〔森 村〕	10
〔宇多大津村〕	1	〔助 松 村〕	2
〔和泉市内〕	1	〔和泉市内〕	1
宮 村	14	二 田 村	50
〔池 浦 村〕	11	〔助 松 村〕	2
〔我 孫 子 村〕	3	南 曾 根 村	27
虫 取 村	22	〔北 曾 根 村〕	7
〔池 浦 村〕	3	〔森 村〕	1
〔我 孫 子 村〕	2	森 村	43
豊 中 村	88	〔二 田 村〕	1
〔和泉市内〕	2	〔千 原 村〕	3
下条大津村	94	〔北 曾 根 村〕	2
〔虫 取 村〕	1	〔助 松 村〕	7
〔池 浦 村〕	3		

〔 〕内は飛地村、太い数字がその村にある飛地の小字数。

さきの表は、各村が他村域に飛地をもっている状況を示しているが、具体的な飛地の分布状態をみるには地籍図が役立つ。昭和二六年調整の「和泉大津市地籍地図」に基づいて、市域北半部の飛地分布図を作成してみると、各村域における他村の村別飛地の筆数がわかる。地図と筆数は省略するが、例えば森村の村域をみると、現泉大津市域に属する旧五か村と、現和泉市域に属する旧二か村、計七か村に及ぶ村の飛地の存在が知られる。

これら旧各村の飛地が、同一市域内であれば問題は少ないが、他都市に及ぶときは問題が大きくなる。それは、同一の旧村域でありながら、市民税・水道料金・通学区、あるいは選挙の投票所などが異なるからである。このような不合理を解消するために、昭和五七年に泉大津市と和泉市とが境界の一部を変更した。図1は変更前と後との状況を示したものである。変更前の飛地の複雑な入組関係が理解される。

二、明治初期の絵図にみる飛地

現泉大津市域に含まれる幾つかの旧村には、明治一年頃には作成された絵図が残っている（泉大津市史編纂室に写所蔵）。それには村域内にある他村領と、他村域にある自村の飛地が描かれており、明らかに飛地を示した図である。おそらく、地租改正に関連して作成されたものであろう。

図2はその一つの尾井千原村の絵図である。同村は宝永七

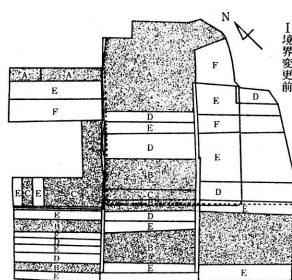


図-1 泉大津市と和泉市の境界変更(昭和57年)
Aは尾井・Bは尾井千原・Cは森(以上泉大津市)・Dは尾井・Eは森・Fは富秋(以上和泉市)。

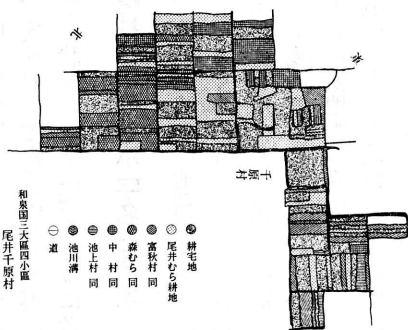


図-2 明治11年尾井千原村絵図

(二七二〇)年に現和泉市域に属する尾井村から分かれた村

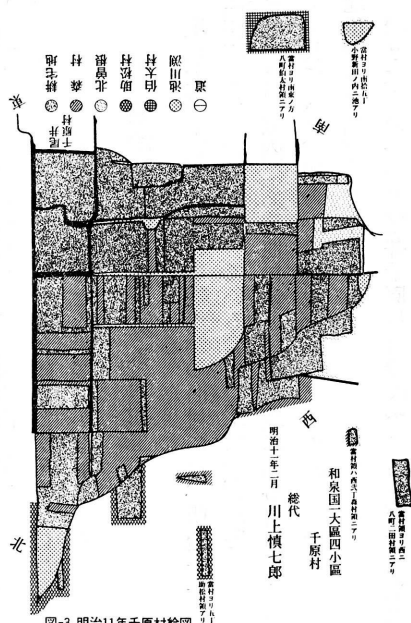


図-3 明治11年千原村絵図

で、村域には母村の尾井村のほか、富秋・中・池上および森の五か村の飛地が存在している。これらの諸村は地籍図から読みとれる諸村と同じである。本村は村域に多くの村の飛地を抱えるが、村外に持つ飛地は表1にみるように少ない。

図3は前図同様、明治一一年作成の千原村絵図である。図の凡例には四か村の色分けを見るが、村域内の他村の飛地は森・北曽根両村で、他は飛地の周辺の村を示すものと解される。本図には、他村域にある本村の飛地を描き、その主要なものには所在地についての注記がある。そのうちの伯太村と小野新田は、現和泉市域に位置する。これは後述の延宝検地に記された二つの「山之池」に相当し、土地台帳の「山ノ池」に当たるとみてよい。

明治初期の△飛地絵図▽とも称すべきこの種の絵図は、さきにふれたように、地租改正に伴う調査に基づいて作成されたりしく、当時の実態をよく表現しているように見える。千原村絵図は、次節の検地帳に関連して再びふれるが、この絵図が示す飛地の状況は近世に遡るように考えられる。

三、検地帳にみる小字名と飛地

検地帳は、検地当時の土地利用・土地保有、あるいは農民の階層性など、多くの内容を示してくれるが、ここでは小字名と飛地の検討に利用する。本市には旧一七か村のうち、三か村の検地帳が残っている。本稿では紙幅の制限があるので、延宝七年の千原村検地帳のみを取りあげる。

まず、検地帳の各筆の最初に記されている小字名を、記載順にあげると表2 I 欄のようになる。これを近代の土地台帳や地籍図記載の小字名と照合すると、同表 II 欄(千原村域)・III 欄(森村その他村域)のようになり、近世前期の小字名の残存率は、括弧付を含めて約八三%を示す。不明の四小字のうち、「二田代」は後述のように二田村域に、「森はた」「小田」「なり田」は、検地コースから考え、その前後の小字付近に比定してよいように思われる。

検地帳の小字名の中に、「助松代」「二田代」「森代」と、村名に代のつくものがある。このうち、「二田代」以外は明治の土地台帳にも現われるが、これは普通の小字名ではなく、

表 2 検地帳と土地台帳の小字名

(土地台帳(1)は地籍図による千原村域、同(2)は森その他の村域)

I 検地帳	II 土地台帳 (1)	III 土地台帳 (2)
1 石 升		(石 井)
2 助 松 代		助松代
3 二 田 代		?
4 は る た	春 田	
5 ま へ	(前 田)	
6 と き わ	トキワ	
7 八 村	八 村	
8 十 七		十 七
9 十 九	十 九	
10 十 八	十 八	
11 八 ノ 坪		八ノ坪
12 河 原		カワラ(瓦)
13 六 ノ 坪		六ノ坪
14 森 代		森 代
15 池 川		} 池 側
16 池ノ加は		
17 森 は た		?
18 志 り ゑ		尻 江
19 う ね た	(畦 田)	
20 かないと	金井戸	
21 山ノはな	山ノ花	
22 宮 ノ 前	宮 前	
23 小 田	?	
24 といの内	(土居ノ後)	
25 な り 田	?	

I 欄の小字名は、千原町自治会所蔵の「延宝 7 年和泉国泉郡千原村 検地帳」に記されている順である。

いわば八その村名の村域にある当村の土地(飛地)√のように解される。なぜなら、例えば「助松代」の地番を地籍図で探すと、助松村の小字「楠木」に該当する。同様なことは「森」についてもいえる。「二田代」は土地台帳に見当たらないが、明治一年の千原村絵図に描かれているので、台帳に欠落があったと見るべきであろう。このように、他村域に飛地がある一方、本村域には森・富秋・中の三か村の保有地があり、周辺諸村間に飛地の入組のあったことを示している。

さらに、検地帳に載る小字名の約八三%が近現代に踏襲されていると述べたが、それを「泉大津市の小字図」に照合すると、千原村(大字)域にその名をみるのは括弧付を含めて一一個(表 2 II 欄)である。残りは森村に七個、助松村と北曾根村に各一個(同 III 欄)存在している。ここで注意すべきは、検地帳の小字名と近現代の村(大字)域のそれを単純

に比較し、両者間の増減、ないし残存率を云々してはならないことである。もし、これで比較すれば、検地帳の小字名の踏襲率は四六%弱になる。

さて、検地帳の小字名七個が森村領に含まれるのをどのようにに解釈したらよいであろうか。検地帳の記載様式からいえば千原村領であり、明治一年の千原村絵図によれば、千原村領内の森村飛地になり、明治中期以降の土地台帳・地籍図からみれば森村領内の千原村飛地ということになる。いずれが正しいのか、変遷があったのか、明らかでないが、二節の末尾にふれたように、明治初年の村絵図の状況が近世前期に遡る可能性は変らないと思う。

千原村と森村との境界変更については、記録も伝承もないようである。千原村の村高が延宝七年の検地帳と明治元年の『旧高旧領取調帳』と同じであることは、その間における村

域の変更はないと考えてよい。しかし、千原村絵図が作成された明治一年以降、例えば、地押調査などの機会に、森村の所属地（飛地）の多い千原村域の部分を森村域に編入するような変更はあり得たであろう。明治初期の千原村絵図の南端部に描かれていた北曽根村領（飛地）も同様な処置がとられたように考えられる。

あとがき

一で述べてきたように、明治中期から現在までの土地台帳や地籍図をみると、現泉大津市域に属する旧各村（大字）は、自村域に他村の飛地を抱え、他方では他村域に自村の飛地を保有していた。表1は、この地域が飛地の卓越地域であることを物語っている。当地域の飛地の入組状態は、二でみたように、明治初年の絵図に典型的に現われているといえる。この状態は、延宝検地とかなり符号するところがある。

三の千原村の検地帳でみたように、近世前期の当村には何何代と称する村外の飛地があり、ほかに森村の帰属地と考えられる数個の小字と北曽根村領の小字一個が含まれていた。

この森・北曽根両村の小字所在地区の境界は、さきにふれたように、明治一年の絵図作成以降に変更された可能性がある。

右のうち、何何代という他村にある飛地が、検地帳に載って

いるのは理解しにくいところである。そのようになった理由は明らかでないが、慶長一〇年の国絵図に、千原・森両村が惣村の形で描かれていることに、示唆するものが含まれているように考えられる。両村は村切が行われたのであるが、上記のような関係から、飛地の整理が十分に行われなかったとみるのである。しかし、この問題は、なお他の事例に当たって検討してみなければならないであろう。

以上、近現代の資料や近世前期の史料を用い、村の飛地をみてきたが、検地帳に記された自村や他村の飛地は、明治初期の絵図や中期以降の土地台帳・地籍図によって追跡できるものが多く存在していた。このことは、一度帰属した土地の根強い慣性を窺わせると共に、土地台帳・地籍図などの近現代の資料が、近世研究に有効なことを改めて理解させたように思う。

付記、本稿の執筆に当たっては、泉大津市史編集委員長福島雅藏氏、および同市税務課・企画室・市史編纂室の各位のご教示とご協力を得た。記して謝意を表する次第である。

注（1）福島雅藏 関東譜代土浦藩の泉州飛地統治『花園史学』一
昭和五六、同 近世前期膳所藩の農民法令と河州飛地『政治経済
の史的探究』所収 昭和五八

（2）地相改正資料刊行会編『明治初年地租改正基礎資料』上中下
（3）福島雅藏 慶長十年九月和泉国絵図について『花園史学』

四 昭和五八

（くわばら ただのり 文学部教授）